
空の色

木本ノエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の色

【Nコード】

N8080X

【作者名】

木本ノエル

【あらすじ】

「空ってさ、心とおんなじって知ってた？」

ある日突然現れた一つ年下の男の子。

空に恋をする彼に恋をした。

優しすぎる恋人と魅力的な彼との間で揺れる気持ち。

彼女が出した答えとは――――

誰にでもおこりうる日常を描いてみました。
恋する女性に読んで頂けたら嬉しいです。
勿論男性の方も大歓迎です。

あまり文章が得意では無いので読みづらかったらすみません。

エピソード

「…信じられない。」

ドアを開けて出た第一声。

後から知ったのだが昨晩は記録的な大雪が降ったらしく、辺り一面真っ白で勿論凍えるような寒さだった。

「最悪。」

眉間にシワをよせてため息をつく私の後ろで隆之がクスクス笑う。

「凜はホント寒いのが苦手だね。」

「しょうがないじゃん。」

そう言って彼の腕にしがみついた。

隆之と付き合い始めてすぐ一緒に住みだし、もうすぐ半年が経つ。

お互い今年25歳。

このまま続けば結婚するのもかもしれない。

そんな事をいつも他人事のように考えている。

今日は久しぶりに二人の休みが合ったので、私が前から気になっていた映画を観に行く予定だった。

隆之はいつも私の都合に合わせてくれる。

ありがたいけど時々むなしくなる。

たまには強引にリード欲しいなんて思ったりするのが本音だったりもする。

でもそれを本人に伝えないのは結局は彼に嫌われたくないからなんだろう。

「先にご飯食べてく？」

当たり前のように組んだ腕を軽く引っ張って彼を見上げて返事を待った。

うーん、言いながら隆之がこっちを見ようとしたと同時に彼の携帯が鳴った。

隆之の視線が液晶を見て、それから私を見た。

「ゴメン、出ていい？」

いいよ、と言う前に通話ボタンを押している。

…だったら聞かないでよ。

隆之は十秒程話すとまた私を見た。

その顔を見ただけで言いたい事が分かってしまう。

「今日はキャンセルだね。」

私が苦笑いすると、隆之はゴメンと言って駅へと走って行った。

隆之の仕事は高校教師。

彼が担任するクラスに1人不登校の女子生徒がいる。

名前は確か“小森”とかいったと思う。

何故不登校なのかは詳しくは分からないが、どうやらイジメが原因みたい。

隆之以外の大人は信用出来ない、とやたらと隆之に電話をかけてきては長電話やたまに今日みたいに呼び出される事もある。

その度に優しい優しい椎名隆之先生は大事な生徒の元へ駆けつける

のだ。

仕方ない事とは言え、毎度毎度こうはやっぱりキツイ。

また置いてきぼりになってしまった私は仕方なく雇われ店長をしている雑貨屋に顔を出す事にした。

キレイな男の子

私の勤め先は5年前に出来た、地元では一番大きな（といってもそこそこ田舎なので都会の人から見ればたいした規模じゃないと思うけど）ショッピングセンターの中にある“feli^{フェリオ}o”というオリジナルの生活雑貨を扱う小さなテナントだ。

「店長じゃ無いですか。」

アルバイトの菜摘が私に気付いて駆け寄ってきた。

「もしかしてイケメン彼氏さんと一緒ですか？ 今日デートなんですよね？」

「キャンセルになっちゃった。てかイケメンじゃないし。」

苦笑いで答えると菜摘は気を使ったのかそれ以上は何も言わなかった。

来週本社で行われる月一の会議に提出する資料を皆と雑談しながらまとめていると、ふと向かいの服屋に見慣れない人影を見つけた。

「あんな人いたっけ？」

「最近入った新しい人らしいですよ。確か店長の1個下だったよう

な。」

同じくアルバイトの可那子がコソコソと言ってきた。

「なんで知ってんの。」

「かつこ良かったんで喫煙室で一緒になった時に聞いちゃいました。」

「アンタねえ…。人妻が何やってんのよ。」

「だってえ。観賞用ですよ、観賞用。ちなみに名前は片丘^{かたおか}智君^{とも}って
いうんだって。」

可那子は楽しそうに皆に報告している。

…呆れた。

そう思いながらも片丘君を見てしまう。

まあ確かにキレイな顔をしている。

それになんか気になるんだよなあ。

何故か凄く惹かれてしまうオーラを持っているよう。

不思議な人だな。

ずっと見ていたくなる。

だげどこれ以上見てたら本人に気付かれてしまうかもしれない。

もしかしたらそれより先に可那子が気付く可能性の方が高い。

どっちにしろマズイ。

私は慌てて資料を片付けると、何事も無かったかのように店を出た。

いつもそう

とぼとぼと駅へ向かう。

腕時計をチラッと見るとまだ3時前だった。

今から映画を観に行こうか。

隆之と二人で観るはずだったあの映画を。

ダメだ。

多分泣いてしまう。

コメディなのになあ。

きつと家に着いたらまだ隆之は帰って無くて。

夜遅くにドアが開いて。

ただいまよりも先に私を抱きしめて。

ゴメンって、絶対埋め合わせするからって言う。

私は隆之が必要以上に遅く帰って来た理由が気になるくせに一切聞

かず。

今度高級フランス料理奢ってよねって笑う。

そして“今度”もどうせ小森さんを優先するんだろう。

いつもいつもそう。

隆之は何の為に私と付き合ってるんだろう。

ダメダメダメ！！

頭を左右に振ってさっきの考えを忘れようとする。

隆之を信じよう。

少なくとも私の事は好きはず。

何度そう言い聞かせてきたんだろう。

そして隆之はこんな私の気持ちなんて知らない。

こんなの。

「…片思いみたいだ。」

分かってない

いつの間にかアパートの前に着いていた。

私は結局何処にも寄らず帰って来たらしい。

鍵を挿し、回す。

と、違和感を感じた。

鍵が開いている。

そうつとドアを開ける。

「凜？お帰り。」

奥から隆之が顔を出した。

「帰ってたの？」

「うん。」

「だったら電話してよ。」

隆之がはっとした顔をした。

私が置いてきばりにされて、ずっと隆之を待っていたとか考えなかったんだろうか。

だけど今はもうそんな事はどうだっても良かった。

私は隆之に駆け寄り抱き付いていた。

「ゴメンな。今からでも出掛けようか。」

「いい。」

「え…」

「出掛けなくってもいい。」

私は隆之の背中をキツく抱きしめた。

「…今日はもうどこにも行かないで。」

隆之は何も言わず私の頭を撫でた。

違う。

そうして欲しいんじゃない。

どうして抱きしめ返してくれないの。

「…抱きしめてよ。」

そう言うと隆之は慌てて私を抱きしめた。

…ゴメン、と言いながら。

隆之は優柔不断

その夜、隆之は久しぶりに私を抱いた。

まるで子供をあやすように優しかった。

それはただ私の機嫌を取るのに必死だったようにも思えた。

彼も私に嫌われるのが怖いんだ。

結局は私達はよく似てるのかもしれない。

深夜1時頃をまわった頃、隆之が急にお腹が空いた、と言い出した。

晩御飯を食べて無いんだから仕方ない。

私はさほどでも無かったが、近所のコンビニに行くのに付いて行っ
た。

コンビニに入ってからずっと隆之はお弁当の前で悩んでいる。

こんな時間なんだからほとんど残って無いのに何を悩む事があるん
だろう。

「お弁当、欲しいの無いんだったらおでんにすれば？」

思わず呆れ顔で言ってしまった。

隆之はその言葉でようやくお菓子とペットボトルのジュースを選んでレジに向かい、ついでに大量のおでんを頼んだ。

隆之がお金を払っている間、私は何故か昼間見た男の子の事を思い出していた。

片丘君…だったっけ。

本当に印象的だった。

なんでこんなに気になるんだろうか。

あれ？

なんか…。

「お待ちせ。」

隆之が私に笑いかけた。

私は差し出された手のひらを握り返して、さっき感じた原因不明の胸の高鳴りには気付かなかったふりをした。

合同朝礼

翌朝。

目が覚めると隆之はもう仕事に出ていた。

そういや今日は職員会議の日だっけ。

寝ぼけ頭でなんとかベッドからはい出た。

私も今日は週一の合同朝礼に出なきゃいけないからいつもより早く家を出る。

急いでシャワーを浴びて、化粧しながら隆之が作っておいてくれた朝ごはんを流し込んだ。

店に着くとそろそろ朝礼が始まる雰囲気だった。

良かった、ギリギリ間に合ったみたい。

隣は向かいの服屋の店長だ。

私と一緒に1人…かと思ったら今日はもう1人誰がいる。

誰だろうと思っていたら朝礼が始まってしまった。

たった10分程の短い朝礼なのにいつも長く感じてしまう。

やっと終わったと思ってため息をついた。

「今日珍しくギリギリだったじゃん。」

話しかけてきたのは向かいの服屋の店長。

向かい同士というのと同じ年というのですっかり意気投合してプライベートでもたまに遊ぶくらい仲がいい。

橋本実和はしもとみわだから何故かはっしーと呼んでいる。

「寝坊しちゃった。」

「ドンマイ。あ、紹介するわ。」

はっしーは自分の隣に立っている人をチラッと見た。

その瞬間私の体を電流が駆け巡った。

だって隣にいたのは…

「こないだから来てくれる片丘智君。片丘君、彼女は向かいのFelioさんの店長の高屋凜さんよ。凄くお世話になってるの。」

片丘君ははっしーの言葉を聞いて、私に

「片丘です。よろしくお願いいたします。」

と、とても丁寧に頭を下げた後穏やかに微笑んだ。

突然の誘い

「そうだ、今日片丘君の歓迎会するから凜ちゃんも来れば？」

思わず片丘君の笑顔に見入ってしまったから急にはっしーに声をかけられてドキツとた。

「ダメだって。私関係無いのに…。」

「別にいいじゃん。他のコも誘ってさ。人数多い方が楽しいって。」

「でも…。」

チラッと片丘君を見たら目が合った。

「是非来てください。…凜さん。」

名前、呼ばれてしまった。

気がつけば頷いていた。

その日は丸一日歓迎会の事で頭がいっぱいで正直ずっと上の空だった。

ふわふわしたまま仕事が終わったのは夜の8時。

歓迎会は9時に駅前のおしゃれな居酒屋に予約を入れているとはっしーからメールが来ていた。

私1人で参加するのはなんだか気まずいので他のスタッフも誘ってみた。

Felioからの参加者は綾瀬君と木田君というアルバイトの男子二人と私の合計3人。

ちなみに可那子は夜遅いからと旦那さんにOKを貰えず、菜摘は明日早番だからキツイと二人とも不参加。

可那子はかなり残念がっていて少し面白かった。

時間まで適当に時間を潰してから、何故か少し緊張しながら指定された居酒屋に向かうとドアの前に人影を見つけた。

「片丘君？」

「凜さん……!!」

名前を呼ばただけなのにドキドキしてしまう。

「なんで中入んないの？」

「入って1人だったらやなんで誰か来るの待ってました。来たのが凜さんで良かった。」

なんで？って聞きそうになったけど慌ててやめた。

何意識してんの、私。

片丘君に連れられてお店の中に入るとわりと賑やかだった。

だけど案内された予約席には片丘君の予想通りまだ誰も来ていない。

必然的に二人きりになってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8080x/>

空の色

2011年11月20日17時45分発行